

## 奈良県ダンススポーツ連盟からの手紙

2月、厳寒の日本を逃れて、タイへ観光旅行に行ってきました。微笑みの国、タイは観光立国、温かく（暑く？ 気温 32~35° c）もてなしてくれました。

反政府デモ隊と軍隊・警察が衝突し、非常事態宣言まで出たバンコクの中心部、現場の道路はバリケードで封鎖されて人の気もなく、バスなど車数台が横転、放置されたままでしたが、私たちの乗った観光バスはその状況を横目に見て、手前でUターン、観光には何の支障もありませんでした。

王宮とエメラルド寺院、ここはバンコク随一の観光スポットです。

タイ国民は厚く王室を敬愛していますので、したがってここは従来から警護の軍隊が管轄する区域になっていて、拝観券をもぎる改札係も全員制服の軍人さん、おそらく近衛部隊所属なのでしょう。

服装のチェックはととても厳しく、女性のノースリーブやミニスカートはアウト。男性でもTシャツや半ズボンダメということです。

王宮の鉄門は閉ざされ、歩哨が守っていましたが運よく衛兵の交代時間に遭遇し、衛兵交代式を見ることができました。極彩色に輝く金色のエメラルド寺院の方は欧米人も多く、観光客でごった返していました。今は使われず博物館になっている西欧風の旧王宮の建物では、映画の撮影が行われたこともあるけれど、その映画は私たちタイ人は見ることはできません、というガイドさんの説明です。

昔、学生時代に見たハリウッドのミュージカル映画「王様と私」(1956)のことなのでしょう。

国辱的映画だとタイ国政府が、強く抗議したことを記憶しています。50年以上経った今でも同国内では上映禁止が続いているようです。1860年代の実話を基にした原作は創作や誇張も多いらしくて、シャム王国（タイ）を野蛮な未開国と誤解されかねない描き方をしていると問題にしたものと思われます。

何かというと上着の胸をはだけて上半身裸同然になる王様（ユル・プリンナー）や、重臣たちの粗野な言動、恋人と逃亡を図って失敗した宮廷の女奴隷に自ら罰を加えようと鞭を振り上げる王様の貴人らしからぬ振舞、そんなシーンの連続に耐え難い屈辱を覚えたのでしょう。

臨終の床に臥す王様の前で、100人を超すハーレムの王の子供たちから残留を懇願されて帰国を撤回する宮廷家庭教師の英国人女性（デボラ・カー）、私にはこの感動的なシーンはとても印象に残っているのですが。

とはいってもこの映画は主題歌「シャル・ウイ・ダンス」の名曲を私たちに

贈ってくれましたし、さらに、海外 19 か国で上映され、日本アカデミー賞を獲って、大ヒット、社交ダンスブームを巻き起こした周防正行監督の「Shall we ダンス？」（平成 8）をも生みました。

私がダンスを習うきっかけの一つにもなった映画です。

この映画のダンスシーンは、短期間の特訓だったはずなのに、主役だけではなくどの俳優さんも皆、見事なステップで踊るのに、当時まだダンススポーツというものを知らなかった私はただ感心するばかりでした。

タレントとは才能という意味、俳優さんたちはそろって運動神経も抜群、私が今でも四苦八苦しているステップを軽々ともものにする才能ある人たちだと、改めて感心することしきりです。

後に聞いた裏話では、舞先生役の草刈民代さんはバレリーナだから、通常、ステップはヒールではなくほとんどがトゥ、だから役所広司演ずる杉山さんとのラストダンスはヒールを使うことが少ないクイックステップにしたらしいのです。もちろんこの曲自体すでに、クイックステップなんですけれど。

これは舞先生のリーダー役としてブラックプールの試合の場面に出演、ダンスの指導もされたであろう田中英和先生門下の女性教師から聞いた裏話です。

ともあれ、杉山さん・舞先生組のラストダンスがこの曲でクイックステップを踊っている途中でフロアが込んできたのか、いつの間にやらジルバに変っている、続々踊りの輪に加わる、たま子先生（草村礼子）、生徒たち（渡辺えり子、竹中直人）、私立探偵（柄本 明）などの面々も、気が付いたらいつの間にやらジルバを踊っている。

何や、私たちのパーティと同じやんか！と親近感も湧き出てくるラストシーンでした。

Shall we ダンス?、とにかく私たちダンス愛好家にとっても楽しい映画でしたね。皆さんはどうぞ覧になりましたか。

（西村増雄 奈良県ダンススポーツ連盟副会長）